第３５回区民車座集会意見交換内容（中原区）

１　開催日時　平成３０年３月１８日（日）　午後２時３０分から午後４時３０分まで
２　場　　所　中原区役所　５階会議室
３　参加者等　参加者１２名、傍聴者２名　　合計１４名

＜開会＞
司会：皆様お待たせいたしました。それでは定刻となりましたので、ただいまから第３５回区民車座集会を始めさせていただきます。
　私は、本日の司会を務めさせていただきます中原区役所まちづくり推進部企画課の山口と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
　今回、中原区では区民車座集会のテーマを「地域防災力の強化に向けて」といたしまして、区内で活躍されている団体の皆様にご参加いただいております。
　お手元にございます資料は、皆様の日ごろの防災活動や課題だと感じていること等をまとめたものでございます。こちらを参考にしながら、意見交換や情報共有をしていただければと思います。
　続きまして、本日の参加者の皆様を、席の順にご紹介させていただきます。
　中原区自主防災組織連絡協議会から、富岡様。

富岡さん：富岡です。よろしくお願いします。

司会：大戸小学校避難所運営会議から、内藤様。

内藤さん：内藤です。

司会：上丸子小学校避難所運営会議から、本木様。

本木さん：本木でございます。

司会：井田共和会第４町会から、松本様。

松本さん：よろしくお願いします。

司会：モトスミ・オズ通り商店街振興組合から、中野様。

中野さん：中野です。

司会：ＮＰＯ法人小杉駅周辺エリアマネジメントから、亀井様。

亀井さん：亀井でございます。よろしくお願いいたします。

司会：中原区総合子どもネットワークから、小野山様。

小野山さん：小野山です。よろしくお願いします。

司会：下沼部小学校から、押田様。

押田さん：押田でございます。よろしくお願いいたします。

司会：中原区社会福祉協議会から、松原様。

松原さん：松原です。よろしくお願いします。

司会：川崎市聴覚障害者情報文化センターから、渡邉様。

渡邉さん：よろしくお願いいたします。

司会：川崎市国際交流協会から、ドン　カック　ターイ様。

ターイさん：ターイと申します。よろしくお願いします。

司会：中原区区民会議から、内田様。

内田さん：内田です。よろしくお願いいたします。

司会：以上、１２名の方にご参加いただいております。
　次に、行政からの出席者を紹介させていただきます。
　福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：向坂光浩中原区長でございます。

区長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：それでは、初めに、福田市長から一言、ご挨拶を申し上げます。
　市長、お願いします。

＜市長挨拶＞
市長：皆さん、改めまして、こんにちは。今日は日曜日の午後ですね、大変皆さんいろいろとご用事があるところの中でご参加をいただきまして、本当にありがとうございます。
　今回で車座集会も３５回目ということで、毎月、各区を回って、こういう集会をやらせていただいておりますけれども、中原区民のアンケートでどんなことを区に期待しているかというところで、その中で安全安心、防災にかかわることということが一番でありまして、区民の皆さんの非常に関心の高いテーマではあるのですが、課題はたくさん山積しているということであります。ですから、このことについて、いろんな地

域の中で活動していただいている皆さんと意見交換することによって、それが課題の洗い出しであったり、あるいはさらに、こういうことの取り組みを進めていくべきなんだということを通じて、さらに工夫、行政の中で、あるいは区民の皆様を大きく巻き込んで、地域防災力の向上に役立つことができればありがたいなと思っています。

今日は有意義な意見交換ができますよう、よろしくお願いしたいと思います。では、よろしくお願いします。

司会：ありがとうございました。

＜取組紹介＞

司会：それでは、意見交換に入る前に、中原区で行われている防災に関する取り組みについて、中原区役所危機管理担当の松山から紹介させていただきます。

中原区役所危機管理担当課長:皆様こんにちは。中原区役所で危機管理担当課長をしている松山と申します。きょうはよろしくお願いします。

早速なんですが、今回は防災がテーマということで、今年度から中原区の総合防災訓練が始まりましたので、つきましては、こちら、地域と連携した中原区の総合防災訓練ということで、皆さんに御説明したいと思います。

最初は、訓練の概要でございます。

訓練の目的ですが、災害時に地域で助け合える仕組みづくりということと、地域の防災力の強化に向けて取り組みを推進という目的で平成２９年度につきましては９月に大戸小学校で６００名の方のもとで、それから第２回目、２月１１日に上丸子小学校で７００名の参加ということで実施いたしました。

実施地区でございます。こちらは訓練ということで、誰でも、どなたでも参加できるというものになっているんですが、中原区を大きく４地区に分けております。毎回２地区でやって、順々にやっていくという輪番制をとるということで、区全体に効果を浸透させるというものになっております。こちらをやっていただく地区につきましては、地域の方々、主に避難所運営会議の方々に主体的にやっていただくということで、毎回、主役はどんどん変わっていくということで、そこでの地域の力をつけていくと。参加した方々については、そういったメニューとかモデルになる訓練等を持ち帰っていただいて、地域に広めていただくということを大きな主眼としております。

訓練の特性でございます。訓練の特性は四つございます。一つ目としまして避難所運営会議の訓練をまずメーン、ベースにするということと、二つ目が発災時の時系列がわかる。３点目としまして、アウトドア、エコ等の観点も取り入れる。４点目としまして、地震以外の災害体験も取り入れていくということでございます。

特徴の一つ目ですが、避難所運営会議の訓練をベースに、こちらのほうをまず主体にしていくと。総合防災訓練といいましても、区役所が主体ということではなくて、まず該当地区における避難所運営会議の地域の皆様に主体的にやっていただくと。そこに、その他多数の関係機関、団体にも協力していただきながら、特に発災時における自助、共助、ほかに公助もあるんですけど、やはり地域の方々に担っていただく自助、共助の強化というところに重点を置いて、さまざまな訓練を提示しております。

こういったものを、参加した皆様には地域の避難所での活動ですとか、自主防災組織での防災の取り組みに活かしていただきたいと、私は考えております。

こちら、該当地区の避難所運営会議の方々が行っている訓練でございます。右上が備蓄倉庫、それから備

蓄品の確認、それから右側、避難所に置いている医薬品の点検、それから避難所の開設ツアーということで、こちらは、まず発災しますと、ここの鍵を開ける、それから体育館の鍵を開けて中をチェックしていく、安全かどうか確認する。その上で点検等済みまして、避難所が大丈夫ということで、開設の提案というのを市のほうに直接、公衆電話等々を設置して開設の連絡をいただくというようなことを実際に実演していただいて、他の地域の方にも見ていただくというものです。

その他、炊き出しや配給のほうの訓練もしていただくと。そういうのをやっていく訓練というのも、こちらモデルということでほかの地域の方々にも見ていただくというものになっております。

特徴の二つ目でございます。発災時の時系列がわかるということで、災害時の時間経過に沿った内容の訓練を見ていただきたいと考えております。いろいろ訓練をやったんだけど、結局これは一体何に使うんだと、わからないというのが結構ありますので、この場合、ひいてはどういったときに必要なんですということを明確にいたしました。具体的には、災害の備えということで、事前に災害情報、防災情報の抽出をしたりとか、家の耐震化を図ったりとか、備蓄したりですとか、防災グッズをそろえたり、その後、地震発生の直後には地震に伴う火災の煙体験、また発災時には１１９番の通報等もしなければいけません。

また、３番目ですね、発生の数時間後には消火もしなければいけないし、家屋の倒壊から地域の方々を救出しなければいけないかもしれない。また、しばらくたてば家族への安否確認ということで、伝言ダイヤル等での安否確認になります。

４番目ということで、下になるんですが、翌日以降、特に避難生活、被災生活になってくるんですが、水やトイレの準備をしなきゃいけない、避難所ではお医者さんが巡回診断をしている。また、ペットですとか、要配慮者の方々についても被災したり、いろんなことが起こってくるということでございます。

こちらは、訓練の当日に皆さんに配った訓練の案内図になります。下のところが、入り口になりまして、まずは備えゾーン、その後、時計回りで発災直後のゾーン、それから数時間後のゾーン、それから翌日以降のゾーンで、大きく、ぐるっと回りながら、発災の時間経過とともに何をしなきゃいけないかということを学べるような工夫をしております。

実際にこちらは訓練の風景ですね、上丸子小学校でやったときになります。ちょっと一部、消えているんですが、こちらに入り口がありまして、まず備えゾーン、それから発災直後を体験していただく。その後、時計回りで数時間後、翌日以降、被災生活というようなことになって、ぐるっと円を描くような形になってございます。

真ん中に、ちょっとテント等があるんですけれども、アウトドア、エコというような、いろいろ地域の方々も楽しめるような、楽しみながら防災を体験していただくような訓練というものも取り入れてございます。

まず、最初の災害時の備えですね。日ごろからできるということで、簡易防災グッズですとかを紹介させていただく、ロープワーク、防災の、楽しんでいただくということで、ピクニック、こういったものはふだんからできることになってきます。

また、下のほうになるんですけれども、家の耐震補強をしていただくとか、マンションのほうでは備蓄、転倒防止等をやっていただくことが主になってきます。

発生直後でございます。こちらも、よくありますが、起震車による地震の体験、それから煙の体験、こういったものには発災後には１１９番をしていかなきゃいけないということで、実際にこちらは消防署の方々とともに、どんなことを通報すればいいのかというのを実際にやっていただく、体験していただくものでございます。

発災後の数時間の様子でございます。身近なもので救命救急ということで、写真の左側にあるのが、頭に巻いているのはパンティーストッキングを使った止血というものになります。また、腕に巻いているものはビニール袋ですね、コンビニ袋。こちらのほうで腕をつったりとか、身近なものでいろんなことができるんじゃないか。その隣で足を結わえている、こちらを支えているのは傘ですとか、それからネクタイですとか、

新聞紙、雑誌等で、こういった骨折の対応をしていただく。なるべく今あるものでやっていただくということになります。

それから右側が、転倒家具からの救出でございます。こういったものも、救出道具があるわけじゃありませんので、例えば、ここですと掃除機のノズル等を使ったり、こういった梃子の原理を利用して、自分たちで地域の方々を助けていただく。

下のほうになるんですけれども、ＡＥＤを使った心肺蘇生ですとか。また、伝言ダイヤル、ＮＴＴの１７１ということで、こちらは、ご家族の方の安否確認ということも数時間の中でやはりやらないと、なかなかその後の活動ができないということで、こちらのほうも体験していただくというようなコーナーを設けてございます。

こちらは翌日以降ということで、避難所の生活でございます。先ほどもちょっとご説明しました避難所が開設したということで、発災時から避難所をどういうふうに開けて運営していくのか。その中でトイレの設置ですとか、また長期化してきますと、下側になるんですけれども、エコノミークラス症候群とか、血液の流れがよくなくなってくるということで、そういった予防への取り組みですとか、またお医者さんたちが来るということで巡回診療、こういったものもやっていただく。

大まかにこのような形で、発災時のフェーズに合わせて、どんな訓練が必要なのかということを学んでいただくことになります。

こちらは特徴の三つ目でございます。アウトドア、エコ等の手法を取り入れるというものになります。

中原区の地域特性ということで、やはり若い世代というのがどんどん入ってきている。また、子供の数も非常に多く増えている。小学校もだんだんできている。その一方で、地域の訓練の参加者、特に町内会で自主防災組織の方が本当に一生懸命にやっていらっしゃるんですけれども、どうしても固定化といいますか決まった人たちが来てしまうところも確かにございます。ただ、こういった方々、誰もが防災意識を持っていただかなきゃいけない、一部の人だけではいけないということで、なるべく誰もが気軽に参加できて、防災の、まずはきっかけをつくっていただくのが必要ということで、アウトドアですとかエコですとか、ロープワーク、新聞紙での簡易防災グッズの作成、いろんなところで、防災に限らず、興味を持てるような内容といったことを取り入れていきたいなと考えております。

例えば、防災の「ぼ」の字を聞いた段階で、私は行かないと、そういう、やはり防災アレルギーではないですけれども、そういった方々もいらっしゃる。そういう方々も、こういうことだったら参加してみようかなというのも取り入れていきたいというふうに考えてございます。

例えばですけれども、アウトドア、エコクッキングということで、１分パスタといいまして、水に数時間、パスタをつけておくと、ゆでるのは１分だけでいいですとか、こういったことだったら日ごろから、生活でも使っていけるんではないかというようなことですとか、ジップロックでご飯が炊けるですとか。また、ふだんのアウトドア、趣味の延長でありながらも、実際にはアウトドアというのはライフラインが止まった状態と全く同じですので、そういったところでは災害時でも使えるというようなものになります。

また、こちらでは火起こし体験というふうになっております。実際にこれで火を起こそうとしてもなかなかつきません。それでよくて、なかなか火が起きないよね、じゃあ火をつけなきゃいけないとき何を準備しなきゃいけないのかなとか、そういった気づきのものを与えるというようなものになってございます。

特徴の４でございます。総合防災訓練ということであれば、地震だけではないだろう、というような声もありまして、こちらは台風の体験ということで、大雨、それから強風、こういったものを体験する台風降雨体験車といったものを用意しています。そういったものを体験していただく。あわせて、そのときにどんなことをしたらいいかというような啓発も行いました。

また、下のほうになるんですけれども、最近は弾道ミサイルの件ですとか、そういうときにどんな警報、音が流れるのか、また風水害時にはどんな警戒の音が流れるのかというのを視聴していただくような、どん

な緊急放送が流れるかといったコーナーも設けておりました。
　こちらは最後でございます。地域の訓練に期待することとございまして、総合防災訓練と地域の防災訓練の、それぞれの訓練で期待することでございます。一番上のこちらは川崎市の総合防災訓練で、こちらは自助、共助、公助ということで、非常に大がかりな、スケールの大きな訓練となってございます。
　そこに対しまして、２段目、中原区の総合防災訓練ということで、こちらにつきましては、なるべく自助、共助といった、今後の自分たちの地域の活動ですとか、ご家庭の備え等に生かせるような訓練メニューというものをなるべく持っていただく、そういったものを持ち帰っていただきたいと考えているところでございます。
　なかなか総合防災訓練だけでは、参加者の皆さんが主体的に全部するということは難しい。その実践の場というのは、下の段になるんですけれども、地域の防災訓練、例えば避難所運営会議ですとか、ご自分の自主防災組織、その中で地域に即した隣近所の実践の場として訓練をやっていただきたいなと考えているところでございます。
　最後の表になるんですけれども、日ごろの地域の関係、こういったものが災害時に反映してくる。こちらの防災だけではないのかもしれませんけど、やはりふだんからの人のつき合い方、そういったつながりというのが災害時にそのまま影響してくると考えております。こういった、ふだんから顔の見える関係づくりというのが実際にはそのまま互助につながってくる。一番大切なことではないかと、こちらのほうとしては考えておりまして、一つは、こういった総合防災訓練の知識、ノウハウ等を身につけると同時に、あわせて人間関係というものがお互いの命を助ける重要なキーになってくるのかなと私としては考えているところでございます。
　雑ぱくですが、説明のほうは以上になります。

司会：中原区総合防災訓練に関する取り組みを紹介させていただきました。

＜意見交換＞
司会：ここからは、市長を進行役といたしまして、参加者の皆様と意見交換を行っていきたいと思います。
　では、よろしくお願いいたします。

市長：改めまして、どうぞよろしくお願いいたします。
　昨年は、まず地域防災力の向上というのが川崎市での最重要課題の一つということで、さらに力を入れたいということで取り組みました。今までは市の総合防災訓練は各区持ち回りで１年に１カ所、当番区のところで大々的にやるというものから、各区で２カ所、１年でということで、地域の皆さんにご協力をいただいてやらせていただきました。
　昨年は２カ所、大戸小学校と上丸子小学校でやっていただいている。残念ながら私自身は参加できなかったのですが、二つのところでやっていただいた、まず感想というか、今、紹介もありましたけれども、それぞれどうだったのかなというのを、本木さんと内藤さんはそれぞれのところの対象の学校でやっていただいたので、ちょっとそのあたりの感想じたものというのを、あるいは課題かなというふうに思っておられることなどを、少し共有していただければありがたいんですけど。

内藤さん：大戸小学校で初めてやりましたんですけれども、今まで訓練というのは結構やっているんです。学校に水がありますよね、三日分ぐらい。それをあけるのは町会員の方が何人も交代してやっているんですけど、初めて大がかりにやって、やはり防災倉庫、積んであるだけなので、棚が欲しいなというのが、できたら。食料とか何かは、棚にないから、見つけるのに、まず。予告でやっておけばよかったんですけど、何

分下手なので、そのままやろうというような形なので、これ、見つけにくいなというのが結構、一つの問題でありまして、これは棚でちゃんと整理しておけば、すぐ取り出せる。伝票とかでもありますよね。あれが一番。書くものとか。医薬品も期限が切れているとか、結構あるんですよ。その辺がありましたので。

それからあとは、初めてのツアーなので、やったんですけど、たまたま私、ツアーの案内役をやったんですけど、たまたま電話線ですか、緊急電話があって、私、ちょっと間違えまして、学校の放送と、もう一つあるんですね、体育館に。それがちょっと戸惑ったとか。

一応、地震とか何か、窓が割れているから、その辺はやっていくんですけれども、なかなか難しい面があって。

参加者が、やっぱりちょっと少ないなと。これからは、参加していただくために、お子さんとか、その辺にも声をかけて、初めの場合でしたので、ちょっとお子さんとかまで余り声をかけなかったんですけれども、お子さんが来れば親御さんも結構来てくれるのではないかなと思って。一応ＰＴＡさんには言っていたんですけど、一応その辺はなかったので、この次からはお子さんも連れて、そうするとかなりいろいろいっぱい来てくれて、見てくれる面もあって。炊き出しとか何かは毎年やっている行事があるので、それで結構やっているので、炊き出しなんかだと、すぐ、うまくいくんですけど。

その辺が、だから、いかに皆さんに来てもらうかというのは一番の課題だと思います。

市長：ありがとうございます。
本木さん、よろしいですか。

本木さん：上丸子小学校の取り組みの部分で、私はたまたま大戸小学校のほうで９月に開催されているということで情報を得られまして、事前にちょっとどんなものなのかなというところを、ちょっと視察がてら、開設ツアーについても同行させていただいた中で、こんな感じでやるんだなというところをもって、我々は第２回ということもありまして、ちょっと、上丸子小学校としての特色なり、今までやってきた取り組みなりというのを皆さんに伝えていきたいということを、まず念頭に置きました。

上丸子小学校そのものというのが、本当に川崎市でもまれに見る自主防災組織の多さという部分で、１３の自主防災組織が上丸子小学校に集まってきます。そういった部分で、それを取りまとめて運営していくという難しさですね。そこの部分が、たまたま上丸子小学校が２７年に全面開校させていただいた中で、２８年、２９年という２回の試みの部分で、避難所の開設訓練をやってみようというふうな取り組みを２８年度からやった部分でございます。初めての取り組みだった部分で、どのように開設、運営会議を含めて、開設をしていかなければいけないかと。

２回目である２９年度については、昨年度のいろいろな反省点を踏まえた中で、情報伝達というのが非常に大切な部分ですよねというところを視野に入れながら、高層マンションも四つ、背負っている部分もありまして、高層マンションとの情報共有ですね、今、ライフラインがどうなっているのか、そしてマンションの人たちはどういうことに困っているのかという部分を含めた形の中で、情報共有をしていくという取り組みを念頭に置きながら、避難所を開設した訓練をやってきました。

まだ２年ということの部分で、最低３回はやっていかないと、慣れということではないんですけれども、いつ起きてもおかしくない部分で、備えるというところが重要かなと思いまして、その訓練はまた来年も引き続きやろうかと思っているんですが、その訓練をやっていたおかげの部分で、総合防災訓練においても１１月に避難所開設訓練をやって、２月に総合防災訓練をやったと。そういった部分では、我々がやった、取り組んでいたことをどういうふうに皆さんに見せようかという部分も、当然、２８年にやった記録についても防災倉庫のほうに、模造紙でいろいろ、班ごとにまとめた部分について、記述して残している。２９年の今年にやった部分についても、そのように、各班ごとにおける課題点、問題点というのも含めて、ルールづ

くりも含めて残してございました。そういうものを、生の部分で、体育館に張らせていただいた。やはり開設ツアーをする部分では、そこの部分、もちろん、安全の確認はもちろんそうなんですけれども、体育館に訪れたときに、こんな形で運営会議をやりましたと。班ごとに対する課題だとかというのも、こういうことが目に見えてわかってきました。それに対して、今後、その肥やしをどうやって生かしていったらいいかという部分を見せたところ、もう皆さん、感心していただいた中で、こういう取り組みをやっているんですねということが、本当に非常に成果としてありがたかったというところがございます。

ただ、まだまだ課題という部分では、お年寄りというのは当然、避難所運営、そしてこれから、子供たちも含めてなんですけれども、避難所を担っていかなければいけない、運営を担っていかなきゃいけないという大きな部分はあるんですけれども、それをいかにして広めていくか、そして今、小学生の部分に関しては、たまたま私も少年サッカーの指導者として広くかかわり、携わっている部分もありますので、小学生の部分は活動を、そのときは中止して、こういった防災活動に極力参加するようにという形で、小学生の部分は参加していただいているんですけれども、やはり一番大きな力となるのが中学生なのかなと。中学生の部分も、やはり中学校との連携というよりも、地域の中で本当に中学生がおられる家庭のお子さんを、一緒に参加して、どのような体験、体感をしていくのかという、そこら辺のつなぎ方というのが非常に大切だなと思っていて、そこの部分については粘り強く、幅広く活動していかないといけないかなと、自分自身は感じているところでございます。

ちょっと話が長くなりましたが、以上でございます。

市長：お二人、ありがとうございました。

お二人それぞれのご意見は、やってみてよかったというふうなことだと思います。内藤さんのお話については、ものはあったけど、切れているものはあったし、棚がないから、そのまま積まれていて、恐らく、この山の下には何があるんだというのが、なかなか発見しづらいというのが見えてきたということだけでも大きな成果だったと思いますし。電話線が、ジャックが混乱していたわけですか。

内藤さん：いや、混乱じゃなくて、たまたま私が開設のときにやっていなかったので、どちらにあるのか。一応説明は聞いていたんですけど。

市長：なるほど。要は、説明は聞いていたけど、実際そこに行ってやっていなかったから、どこの話を言っているのかというのがわからなかったと。

内藤さん：はい。だから、経験はいい経験です。

市長：そうですよね。こういう話はすごくよくあるケースだと思います。私も説明を受けて、地図上ではわかっていたんだけど、どこだったのかというのがよくわからないというのが、これはよくあるケースですし、それがわかったということは大きな前進なんじゃないかなと思います。

本木さんの上丸子のところは既に、２８年、２９年と、自主的な避難所運営の会議をやっていたと。それが今回の総合防災訓練のときに大きく役に立ったということですから、もう一回ぐらいしっかりやっておかないとということですね。多分、本木さんのところなんていうのはしっかりやっておられる、川崎市内の中でも、そういう避難所運営をしっかりやっておられるところなのではないかなと。それでもまだ不安が残るというのは、相当やはり全体のレベル感としては、本木さんのところはかなり上のところだとすれば、それでも足りないと思っている方と、あるいは今、一般的には相当まだ足りていないということなのではないかなということが明らかになってきたというふうに思うんです。

さて、この防災訓練に今日ご参加の皆さんで、どちらか参加していただいたという方は。手が挙がりました。まず、１回目、大戸小学校のほうに参加された方は、はい。
それでは、最初に手が挙がりました小野山さんから、参加されたときの感想などを。

小野山さん：両方、防災訓練は参加させていただいて、すごく内容の充実したものというか、すごく危機感、いい危機を持てるような印象でした。
すごく、そんなすてきな催しなんですけれども、訓練なんですけど、先ほども紹介であったように６００人から７００人の参加というのは、流れのある中の６００人から７００人、すごく少ないなという印象を受けて、もったいないなと思ったのが参加者としてなんですけれども。
多分、防災訓練という言葉にアレルギーを持っているというお話も先ほどあったんですけれども、防災意識の向上というところの観点で、例えばアウトドアとエコとか、そういう観点を入れてバーベキュー大会とか、そういうふうな、ちょっとネーミングを変えてみたりとか。本当にもったいないと思うんですよね。なので、ちょっとそういう広報とか、みんながどんなふうにしたら反応してくれるかなというのをしっかりと見据えていけばいいなというところは思って。
あと、ごめんなさい、備蓄の中で、先ほどの古くなったというので、オムツがパリパリになっていました。オムツがパリパリになっているということは、もともと使えるものですよね、そういうものが、うまく回していければ、何かに活用できれば、もっといろんなことに幅広く、それを使って、いろんな人がどうにか乗ってくれるのかなとか、そういう気持ちもあります。

市長：ありがとうございます。
人数がやや少ないのではないかという問題、これは非常に課題だと思っていまして、後ほどこのことはぜひ私もお知恵をいただきたいと思っているんです。ただこの中で、ああいうやり方があるのではないか、こういうやり方があるのではないかというのは、ちょっとまた後ほど、そのことに特化してやりたいと思いますので、ちょっとお待ちください。
ローリングストックじゃないんですけど、オムツもカピカピ。ほかのところで調べると、もっと出てきちゃうのではないかと思いますし、ほかの区、いろんな防災備蓄倉庫の中もチェックしないといけないですね。ありがとうございます。これはいい気づきを、またいただいたということで。
亀井さんは、どちらのほうでしたか。

亀井さん：私は上丸子小のほうの訓練に参加させていただきました。私のほうは、マンションの防災という形で、今こういう取り組みをやっているというのをご案内する展示の対応なんかもやっていたんですけれども、まず、全体の感覚からすると、上丸子小学校の訓練は非常に活発、にぎわいが多かったかなと。それは何かなと思ったのですが、やっぱり子供の数が、まだまだ少ないのかもしれませんけど、結構な数、来ていて、みんないろんなところを回遊して、それぞれ楽しみながら防災の啓発を受けているというところを見て、すごくいいなというふうに見ていたんですね。
もう一つ、気になったところなんですけれども、マンションの防災の展示のところに対して、いろんな方が来られたんですけれども、マンションの方もいらっしゃいましたし、上丸子小の周辺の古くから住まれている方というところもいらっしゃいました。結構、個人的な防災に対する不安みたいなところですね、誰かに聞いてほしいみたいな形で、私以外にもいろんな方が展示のところで話を聞いていました。
何かなというところを後で考えたんですけど、情報はいっぱいあると思うんですね。いろんなところにあふれているぐらい、あると思うんですけれども、それを自分の家、自分の生活というふうに当てはめたときに、何が一番合うのかなというところ、ここに対して解が見出せないので、そこから先、実行に移せない。

それでぐるぐる回っているのかなというようなところを、お話ししながら感じた次第です。
　そこに対して何か、訓練というところで何かできるのかというのは、正直まだ頭の中に解はないですけれども、情報を発信してから、もう一組、何か実行につながるような情報を発信といいますか、掘り下げといいますか、そうしたようなところがあれば、こういうようなお話をされる方の不安というところも少しは解消されていくのかなというところを、訓練に参加して感じた次第です。

市長：ありがとうございます。
　すばらしいご意見をいただきました。もう一段深いところに入っていくために。これも大事な話だと思いますけれども、また後ほどこのことについても深い議論をさせていただきたいと思います。
　参加されたターイさんは、どちらのほうに参加していただいたのでしょうか。

ターイさん：私はベトナムから来ました。この間、上丸子の防災訓練に参加しました。初めての参加で、いろんな訓練、地震とか台風の体験できて、本当に勉強になりました。
　ちょっと一点、気になったのは、私は今、新丸子駅のところに住んでいて、結構、外国人をよく見ますけど、防災訓練のときはほとんど日本人ですね、多分、外国人はいない。私と同じで、万一、地震のとき、どうすればいいか、みんな悩んでいるけど、ちょっと防災訓練の情報の発信とか、外国人向けの、そういう発信ももっとやってもらいたいかな。

市長：ありがとうございます。
　渡邉さんは参加していただいたんですか。

渡邉さん：川崎市聴覚障害者情報文化センターから参りました渡邉と申します。
　情報文化センターの中で、聴覚障害者災害対策訓練というのがあります。委員会がありまして、当事者または手話通訳者、要約筆記者、またはセンターの職員が集まって、そこでつくっている災害対策委員会というのがあるんです。そこで平成２８年から川崎市総合防災訓練に参加させていただきまして、その次の平成２９年からは上丸子小学校、大戸小学校の防災訓練にも参加させていただきました。
　そのときに何を目指したかといいますと、聴覚障害者の理解ということを広げたいと思っています。聴覚障害者といいますと、一般的には要援護者だと見られています。意外とそうではなくて、支援者にもなれるということで、耳が聞こえない、耳からの情報が入っていないだけで、体は普通です。若い人が難聴者にもたくさんいます。それが実際に、平成２８年度、多摩区の総合防災訓練に参加したときに、救援物資の流入のときに、いろいろお手伝いすることができました。何を手伝ってほしいのかということを、周りが、そこら辺の必要なお手伝いというところ、マッチングというところで、防災力の向上につながると思いました。助けられるだけではなく、見られがちですけれども、助ける側に回れるので、そういう情報を求めています。若い人の力もたくさんありますので、そういう若い力、聴覚障害者の若い力も使っていただけるといいと思います。

市長：ありがとうございます。
　今、お二人、ターイさんと、それから渡邉さんからお話をいただきましたけれども、外国籍を持っておられる方も今は川崎に３万人ぐらいですかね、お住まいになっているということで、中原区だけじゃなくて、全市で今１３０カ国ぐらい、外国の方がいらっしゃいますので、その方たちも、今、実は渡邉さんに言っていただいたように、ターイさんのように日本語が堪能だという方は、むしろ分かる方が、言語が、例えばベトナムで日本語が余り得意じゃないという方に対して情報を発信する役割を担うこともできる。あるいは渡

邉さんがおっしゃったように、いわゆる障害者、支えられる、支援される側ではなくて支援する側にもなれるんだというふうなお話をいただいたので、これは本当にどう連携できるかということを、もっともっと各地域の中で、例えば渡邉さんはここに住んでいるから、こういう役割をお願いできませんかということを、事前に、災害が起きたときじゃなくて、災害が起きる前から、地域の中に役割として、いざとなったらこういう形で、渡邉さんお願いできませんかということを事前に取り決めていくということが、大事なんじゃないかなというふうに思います。

それぞれの地区で、こういう形でできていけば、いいモデルになるのではないかなと思います。

先ほどお話に出ていたと思いますが、それぞれの地域にどう合っているのか、亀井さんのお話ですよね。中原区は特に若い方々が多い、子供さんがものすごく多い。乳幼児もものすごく多いということも特性でありますし、それから単身世帯、一人でお住まいの方というのが、何と中原区民、中原区の全世帯の４８％ということなんです。

今、世帯数が１２万７，０００･･･。

区長：約１２万８，０００です。

市長：１２万８，０００世帯。人口が２５万４，０００人ですけれども、今申し上げた１２万世帯の４８％ですから、約半分はおひとり暮らしなんですよね。これは、若い一人の独身寮もあるし、もう一つの可能性は、いろんなパターンはありますけれども、高齢で独居されている方というふうなものも多いという形ですから。

この前に熊本地震がありましたけれども、熊本市の隣町に行ったことがあるんですけど、そこのまちは人口６，０００人ぐらいだと思うんですけど、２００人以上が消防団員なんですね。これはすごい話なんですけど。川崎で換算すると、２万人以上の消防団員がいるという計算になるぐらい、消防団員が網目のように張りめぐらされているわけです。ですから、すごい地域のきずなが強い地域と、中原のようなところで、どう私たちの命を守っていくのかというのは、おのずと手法は違うはずで、その地域特性に合ったものをどれだけ細かくやっていけるかというところに、私たちの課題があるんだろうと思います。

今までの話を受けて、社協で各地の防災ボランティアセンターなんかをやっていただいたりとかというのがありますけれども、特に福祉の課題というのはすごく、要支援、要援護の方々たちをどう丁寧に事前にフォローアップしていくかということはとても大きな課題だと思うのですが、松原さん、そのことに限らなくても結構ですけれども、お立場から少しご発言いただけますでしょうか。

松原さん：災害弱者は、最もお年寄りが多いと思うんですよね。先ほど訓練の際に、子供たちも大分参加したというようなお話ですが。

ちょっと逸れますけれども、学校の校門で１０年来、挨拶運動というのをやっているんですよ。おはようございますと言う。このときに、あした防災訓練があるよ、あさってあるんだよと、子供たちに伝えるということが非常に大切なんです。子供たちが防災訓練に来てくれる。あのおじさん、あのおばさんがきのう言ってくれたよねというような、こういうＰＲも一つ、非常に必要だと思います。

それと、非常にネックな問題があります。なぜならば、ひとり暮らしの老人、老老介護世帯、身障児をお持ちの家族、こういう人たちのリストを民生委員さんが把握しています。民生委員さんの把握したものが各自治会長、町内会長に渡されています。しかし、災害が発生した時点では、それを知っている人たちが災害に遭ったばかりで、誰も伝達することができない。これは個人情報保護法で決められています。これはやはり命を守るという観点から言えば、それは何とかしなくちゃいけないと思います。お隣の東京都、２３区の一つの区の区長が、これはだめだと、情報公開に踏み切って、やっているところもあります。これはやはり

川崎市も何とか考えないと、救い出せません。知っている人が、民生委員と町会長、自治会長だけではだめなんです。しかし、民生委員の方は３５０世帯から４００を超えていますよね。その中を把握しなくちゃいけないのに、災害弱者の最も弱点とする身障児を抱えているご家庭、老老介護、それからひとり暮らしの老人、救えません、はっきり申し上げて。ということは、結論から言えば、多くの方が情報を知っていなければいけないんです。個人情報保護法でだめだよということになってしまっている。これはいち早く考えて、実行に移さないと、明日来るかもわからない災害に対して、救えないという状況があります。これはぜひ、市長をはじめ、お考えいただきたいと、このように思います。

市長：どうもありがとうございます。

とても大事な話で、これまでも民生委員の方々、町会長の皆さんとも、かなりこれはやりとりがされてきております。実は要援護者の、自分はいざとなったらお願いしますということを手挙げにするのか、あるいは、そもそも今要援護者というところから、私は大丈夫ですと手を下げてもらうのかというふうな、どういうやり方があるのかということは、かなり、各区の町会や民生委員の方たちとの議論があって。実は、これは各区の町会あるいは単位町会ごとでも相当考え方はばらばらです。そんなに手を挙げられても、今、松原さんがおっしゃったように、できないよというところもあれば、いや、それは積極的にやろうと言ってくださるところもある。それはいい、悪いではなくてですね。実際に、例えば民生委員の方も、地域の人全員が被災者になるという想定の中で、恐らく２０分、３０分をかけてその一人の方を助けに行くというよりも、むしろ隣の人が、あるいは隣の隣の人が、向こう三軒両隣の人たちが、ここの人たち、ここは今、何々さんがいて、足がご不自由だったよなというふうなことというのを、ある意味システマティックにではなく、日ごろの日常の生活からそれがわかっている、これが理想だと思うんですね。ただ、理想というのがなかなか、今申し上げた地域状況の中では、システムでやっていかなくちゃいけないのではないかというふうなご意見だったと思います。

本当にものすごく大きな課題で、ちょっと今は、これで行こうというふうな話がないんですけれども、しかし、こういう課題認識の中で、それぞれの地域で、もっとどうしていくかというのは、やっぱり話を進めていきたいと思います。

今、学校のお話も出てきました。挨拶運動。先ほど、避難所運営会議でも、それぞれの避難所となるのが学校ということで、その点について、押田さんが教頭先生ですので、そういう点では、学校に期待される部分は多いだろうし、だけど逆に期待され過ぎちゃって、なかなか難しいよというところも現場の声としてはあるかもしれません。ですから、そういった意味で少しご意見をいただければありがたいです。

松原さん：いいですか、もうちょっと。

市長：どうぞどうぞ。

松原さん：現在、町会長、自治会長あるいは防災関係者のお宅には、防災無線が設置されています。この防災無線が現在役に立たないだろうと私は思っているんです。なぜならば、町会長がマンションの１０階にいる方、あるいは奥まった家にそれが設置されていますと、情報が届かないからです。また、防災無線を人が多く寄る場所、駅の近くとか、そういうところへ設置することによって、犠牲者が少なくて済むと思うんですよ。

ご存じですか、今の防災無線がどこにあるか。町会長が新しく、自治会長がなられても、それを設置していないところもあるんです。知らない方もいる。これはだめです、はっきり申し上げて。行政から日夜を問わず情報が流れてきます。でも、情報たるものがもう少し、災害に密着した情報じゃないと意味がないわけ

です。なぜならば、例えば７年前に起きた３月１１日の問題でも、こういう情報は少しでも流すということでなければ、知らない人もいるわけです。ぜひ防災無線について、もう一度確かめていただきたい。こんなふうに思います。

市長：わかりました。防災無線のことについても調べて、改善するべきことがあれば改善しますが、少なくとも情報の出し方というのは、町会長に全てを流しているというよりも、市民の皆さんに、圧倒的多数の市民の皆さんに、あらゆる手法を通じて、複数のやり方を通じてお伝えして、正しい情報を伝えるという方法ですので、例えばツイッターが大事だとか、意味がないよという方もいらっしゃるけれども、ツイッターは非常に重要な手段だと思います。あるいは、インターネットのホームページで正しい情報をしっかり発信するということというのは、圧倒的多数の正しい情報を的確に出していくということもそうだと思います。川崎市の今やっている防災アプリというのも、一つのツールでしょう。防災行政無線も一つのツールです。ですから、複数のチャンネルで正しい情報を効果的に伝えていくということが大事だと思いますので、そういった意味では、ご指摘のところも確認させていただきたいと思いますが、多チャンネル化でやっていくということだと思います。

さて、ちょっと話は戻りますけれども、押田さんのところで学校の体制、あるいは今課題と思っている、あるいはこういうこともできるんじゃないか、あるいは避難所運営あるいは防災訓練なんかでこれまでの体験したことを踏まえて何かご意見をいただくことがございましたら。

押田さん：私の、こちらの資料のほうは、実は３．１１のときの避難所開設のときに自分が課題と感じたこと、それと、こうしたらいいんではないかなという、自分なりに考えたことをもとに作成させていただいたものなんですね。

３．１１でたくさんの方が、そのときに私が勤めておりました学校に避難して来られました。いろいろと要求されたことも多かったんですけれども、その中で一番、高齢の方々から言われたことが、体育館のマットを貸してくれということでした。老人なので、板の上に寝るのはとても痛い。とてもではないけれども寝ていられないので､マットを貸してくれというふうに言われたのですが､マットの数も限られておりますし、どの程度、どの方にお貸ししていいかという判断にも困りました。それから衛生的な面でも、子供たちがいろいろ、トイレとか、いろんなところへ行く上履きのまま上がることもありますので、そういう点も踏まえると、どうしたものかということで、当時、学校のほうでは、申しわけないけれどもということで、マットについてはお貸ししなかったということがありました。ですので、学校にある物資、体育館が避難所になることが多いかとは思いますけれども、そちらのものをどういう方に、どのようにお貸ししていくかということも、地域の方等含めて学校が考えていかなければいけないことだというふうに思っています。

また、ペットの同伴者の対応ですね。上丸子小学校で行われた訓練のほうに参加させていただきました折に、３．１１のときに感じたペット同伴の避難者についてのことも思い出しました。当時、ペットを連れて避難してこられた方がいらっしゃいましたが、体育館に着きましたら、非常に多くの方がいらっしゃいますので、ペット同伴での避難はできないということでお断りしました。けれども、ペットも家族の一員というふうに考えていらっしゃる方にとっては、とても辛いことだったようで、外で涙を流しながら、お母さんに慰められているお子さんがいらっしゃったんですね。上丸子小学校はペット同伴の避難所というブースがありましたが、果たして自分が住んでいる地域の避難所がペット同伴可能が避難所なのかどうか、こちらのほうも皆さんにとっては大きなことなのかなというふうに感じました。ですので、そのあたり、同伴可能かどうかということも、先ほどから出ております広報というところにかかわってくる問題かと思いますので、そういったことは、皆さん、地域の方等を含めてお話しされるといいのかなというふうに思いました。

それから、３．１１のときには、まだ職員が在勤している時間帯に起きましたので、職員がかなり、まだ

残っていまして、いろいろ手配することができました。けれども、夜間、それから休日に震災が起きる可能性もございます。その場合につきましては、町会の方々が中心となって避難所の開設に当たられると思いますので、やはり町会の方々がふだんから学校の職員と連携を取り合いまして、どこにどういうものがあるということだけではなくて、どういうものが活用可能かということも確実に把握しておくことが必要なのかなというふうに思っております。

本年度、本校のほうが、ＰＴＡそれから地域の方々と共催の形で、子供たちの避難所体験イベントを行いました。そのときに町会の方々も、避難所の開設に当たって使うであろうものを実際に体育館のほうに出して、テントも出して、こういうようなものもありますよということを本校の児童、それから保護者にもお伝えする形で開かれていたということがあったんですけれども、そのときに必要になってきた、避難されてきた方々に休んでいただく区分け用のテープというのも町会で用意されました。でも、これというのはいざというときにそのまま使えるものですので、そういうもの、それから必ず必要になってくる受付時の名簿ですとか、先ほどからお話も出ていましたけれども、筆記具、必要表示、そういうものは最初から避難所開設のマニュアルとともに備蓄倉庫に、すぐ一番取り出しやすいところに入れておくのがいいのかなというふうに感じました。

文房具の一つの中にカッターですとかはさみというのは絶対に入れておくべきだなと思ったことがあったのですが、３．１１のときにアルファ米が届きました。いざ皆さんにお出しするために用意しようと思ったときに、段ボールが開かなかったんですね、開けられなかったんです、しっかりと包装されていたために。たまたま、学校でしたので、はさみもカッターもありましたが、もしも避難所の備蓄倉庫を開けたときに、それがなければ、すぐに出したいものが出せないということもあり得ますので、そちらも備蓄倉庫のほうに、一番取り出しやすいところに、まずあったほうがいいのかなというようなことを感じました。

避難所を開設するに当たっては、さまざま、課題だなというふうに感じたことがありましたので、ちょっと私が記載させていただいたところにつきまして、皆さんでご一読いただいて、ご検討いただけたらありがたいなというふうに思っております。

市長：どうもありがとうございました。

今おっしゃっていただいたように、ルールづくりというのはすごく大事だと思います。いろいろ、ペットだとか、あとは学校と地域でどういうルールづくりをそれぞれでやっていくかということなんですけれども、ささいな話で言うと、はさみや文房具だとかという、学校にあるものですから、災害時だったらそれはもうじゃんじゃん使おうというふうなことですし、一般教室は今は避難所になっていませんが、一般教室は今までほとんど使われていません、どこで災害が起きても。しかし、これからは、今、教育委員会とも相談していますが、こういった一般教室も、当然スペースがあるわけで、トイレもスペースも。そういったところに避難者が、全て耐震化は終わっていますから、こういったところを利用していくというのはこれから大切な課題だという認識で、それは教育委員会としっかり調整していきたいなというふうに思っています。

そうですね、とにかく川崎は人口密度が大阪市に次いで高いというところで、ましてや中原ということになりますと、少しのスペースでも大事ということになってきますから、あらゆるものを使っていくということが大事なんだと思います。

内田さんも区民会議でご活躍いただいていて、防災の取り組みなんかにも、これまでかかわっていただいているんですが、今の、全体的なお話でも結構ですし。

内田さん：中原区で行われた２回の総合防災訓練で、私どもの地域では平成２７年に開設運営訓練というのをやったんです。それは何で気がついたかというと、それまでの避難訓練、先ほどありましたけれども、消防の方を呼んだり、地域の消防団の方をお手伝いして、避難訓練というのは隔年のごとくずっとやってきた

んです。それが東日本震災とか、それから３．１１、そして熊本地震に結びつけたときに、何かこれでいいのかなというようなことを感じたんです。そして開設を、我々が元気で、小学校で避難所開設になるので、そこに駆けつけたとして何ができるんだろうかと。よくテレビに映っているのは、どなたかが面倒を見ている、多分それは地域の方、町会の方々なんだろうねというふうに思ったときに、何かできないだろうかということで、私どもの小学校で開設のことを、マニュアル書はあったんですけれども、開設してみた。やはりいろいろ問題点が多くて、次の年はできないよね、じゃあ１年考えて、次の年にやろうねと思ったのが、ことしの平成３０年に当たっていますけれども、今、個々に言われていました、ペットの問題もそうだし、中学生諸君にも、結局避難された方がそこで、例えば長時間いるとなると、時間的な空間ができる。それを若者たちがそこで、どうなんでしょうね、具体的にはわかりませんが、お話し合いを持ってくれるとか、寸劇をしてくれるとかというようなことがあると、多分、和んでいただけるのかなというような気もするんです。そんなふうに向かってやりたいなと思っているところ。

そして区民会議の中で防災に関していろいろ調べていくうちに、今、皆さんの手元にあります、「無事ですシール」を見ていただけるとわかると思いますが、これは黄色で、黒の文字が書かれている、そしてとりあえず何か災害、いろいろ一般的な多くのことがあるかと思うのですが、地震だけじゃなくて、そのときに「無事ですシール」を家の玄関なり、門なりに張っていただけると、その家庭はまず大丈夫なんだ、では、それのない方々を最初に訪問しようねと。先ほど出ている見守りネットワーク、公助、共助、自助で、その後の、私がとても最近言っているのは互助、隣近所ということでお話がよくあるんですけれども、語呂合わせで互近所という、本当の隣近所の見守りネットワークが必要なんじゃないかというふうに感じているところで、シールをつくってみました。活用するのはまた別なんでしょうけれども、何か町会として安心安全、見守りができたらいいなと、そんなふうに感じました。よろしくお願いします。

市長：ありがとうございます。

実は、避難所運営というのはとても大事なんですけれども、衝撃的な数字がですね、川崎市のアンケートをやって、備蓄している方というのはどのぐらいいますかという数値が、熊本震災以降、まだ落ちているんですね。普通は震災が起きると備蓄率は大体アップするものなのですが、熊本地震があった後でも備蓄していますというパーセンテージが落ちているというのが、実はすごく、いろんな要因があると思うのですが、映像によるインパクトというのがすごくあって、恐らくそれも一つの大きな要因なんじゃないかと言われているのは、ニュースで全国から支援物資がばんばん届いているというふうになると、いつかどこかで誰かが助けてくれるんじゃないのという意識というものが働く。大きな震災があって、だんだん整備されてくると、うちが備蓄をやっていなくても避難所へ行けばあるんじゃないのというふうな、そういう感覚になる。でも、実際はそうではないんだということを、はっきりと行政としても言っていく必要があるし、それは言っていっているつもりなんですけど、なかなか伝わらない。

なかなか伝わらないというのは、先ほど亀井さんもおっしゃっておられましたけれども、備蓄にしても全体で川崎市で１３万８，０００人分しかないんですね。それ掛ける三日、四日というふうな話ですから。これというのは火事で焼け出されたりとか、住宅が倒壊して家にはいられないという方たちの被害想定に基づいての備蓄ということですから、一般的に何となく不安だと、家にいてはいけないんじゃないかというふうに言われて避難所に来られては、これはもうパンクするのは当然なんです。ですから、ペットがいらっしゃる方も、何となく不安だから、家は全然大丈夫なんだけど、何となく、抱いて避難所へ行きたいということになってしまうと大変だということなので、この認識をちゃんとしていただくと、当然、備蓄率も上がるだろうし、当然、住宅の耐震化も進むだろうし、どういうふうにみずから情報をとっていくかということが大事なのか、あるいは自分は支援が必要だというふうな、例えば身体的にも精神的にもということで必要であれば、どういうふうな形で日ごろから備えておけばいいだろうかということになるんですけれども、実際は

そうなっていないところに最大の問題がある。
　ですから、訓練というものを通じて防災意識をどうやって高めていくかということをやっているわけですけれども、必ずしもそれが転換できているのかなというところに課題はあるよねというところで、僕たちは、皆さん、一生懸命にやっていただいて、私たち行政もやっているつもりになっているんですけれども、しかし、まだまだ行っていないよねというところに大きな課題があるんだと思うんですよね。
　まだご意見を言っていただいていない方が３名いらっしゃいますけれども、富岡会長、よろしいですか。今までのことでも結構ですし、全般的なことでも、私に対するコメントでも結構です。

富岡さん：避難所の関係なんですけどね、ご存じのとおり、こちらの報告書にも記載させていただいておりますけれども、自主防災組織が１０８組織あるんですけれども、その中で主に町内会の組織、中原区は町内加入は７５町会が入っているんですけれども、それぞれ、その中で、自主防災組織の避難所運営会議の中にはマンションも入っておりますけれども、実際に会議をやりますと、いろいろ問題点もございますけれども、マンションの場合はマンション自体で管理しているから、避難所運営会議をやっても、余り出てこないんですね。ということは、どういうことかというと、町会活動で町会の一員になっている町会もあるし、全然入っていない避難所町会メンバーのマンションもあります。町会に入っているマンションの場合、先ほど言いましたように高層マンションですから、実際に自分たちは自分たちのところで守る。ところが、我々一般住民の世帯は、いざとなったら避難所に頼るようなんですよね。ですから、避難所運営会議をやっても話がかみ合わないんですね。それが一つ。
　それと同時に、先ほど役員の固定化というか、参加者の固定化というのがございましたけど、避難所運営会議イコール町会の役員がそのまま避難所のメンバー、役員になっているんですね。町会役員も固定化しちゃっています。ですから、先ほど来からいろいろ出ておりますが、若者のお手伝いというか、体制整備なんですけれども、実際に災害時になったときに、若い人は勤めに出ておりますから、そこにいないわけですよね。ですから避難所運営で行動して活動していただけるのは、ほとんど、お年寄りが主体になっちゃうんですね。先ほど小学校云々が出ておりましたけれども、実際に若者にお手伝いしていただくには、やっぱり中学校の生徒ぐらいが一番、活動していただける。地元にいるわけですよね。ところが、中学校との交流が余りないんですよね。小学校とはいろいろ交流、避難所とか。前に中学校区のネットワーク、防災ネットワークというのがあったんですけれども、今は中学校のネットワークというのは全部で８校ですか、中原区は。学校の避難所運営会議が２８カ所あるわけですよね。そういうようなもので、２８校区の学校区の避難所運営というのが、それぞれの地域によって体制が違うわけです。その辺がちょっと一つ問題があるのと。
　参加していただける方は大体、防災に対する関心がある方ばかりなんですよ。関心のない方をいかに、何というんですか、防災訓練のときに、みんな、防災に対する必要性はわかっているんですけど、実際に参加してこないんですよね。以前、避難所会議がある前には、各町会ごとに防災訓練をやっていたわけです、避難訓練なり、消火訓練なり。自分のところの空き地でやったり、あるいはマンションのところを利用させてもらったり、学校の校庭を利用させてもらったり。毎年はできませんでしたけれども、何年かに一回ずつやっていたわけです。当然、消防署とか消防団にもお願いした中でやっているんですけれども。それがだんだん飛躍して、今は避難所運営会議になってきたわけですよね、ある程度、地域を広げた中で。
　備蓄の問題なんですけれども、自分たちのことは自分で守るということを前提でやっていますから、各家庭で３日分とか４日分の食料を備蓄してくださいとお願いしていても、実際に備蓄する場所がないと。町会も備蓄するんですけど、賞味期限があるから、無駄になっちゃうんですよね、備蓄が。要するに５年に一回ずつ、買いかえなきゃいけない。１０年もてばいいんですけれども、なかなかそうはいかない。そうすると、町会の予算もありませんから、食料品の備蓄はできません。機材の備蓄をしているわけです。機材の備蓄というか、機材を購入しているとか、いろいろ、毛布なり、ブルーシートだったり。ですから、食料に対して

は各家庭で備蓄してくださいというふうに町会はお願いしている。役員会なり、広報で回している。
　市のほうでも立派な広報の冊子をくれているんですけれども、保存版というのがありますよね、冊子が出ている。あれは全世帯に配っていただいたのかどうか、ちょっと私も記憶がないんですけれども、すばらしい冊子ですので、できれば全世帯に配っていただければ。

市長：全世帯です。

富岡さん：そうですか。ところが、全世帯でも、町会から配っているわけですよね。だから、町会に入っていない、先ほど来から出ている独居老人だったり、独身寮だったり、賃貸マンションに入っている人も町会に入っていない、管理人もいない。

　そういうものがありますので、自主防災組織としては、昨年は行政のガバナンスに出たと思いますけれども、私も記録、調べてきましたけれども、防災訓練を５７回やっているんですね。全体会議が３回、リーダー研修が１回、２９年度の活動内容でございますけれども。いろいろ行政も一生懸命やっていただいているんですけれども、参加する人員は、先ほど来から言っているように、決まった人間が出ている。だからそうじゃなくて、もっと大勢の方に。

市長：そうですね。

富岡さん：それはやっぱり広報を通じて、いかに、必要性はみんなわかっているんだけれども、もっと身近に、危機に迫るような。特にこの辺は地震が一番大変なんですけれども、災害というのは。だけど最近は豪雨の関係で、洪水とか、中には一部、井田のところに山がありますから、崖の関係もございますけれども、基本的にはやっぱり地震が一番怖いので、地震に伴う二次災害で火災が困るわけですね、延焼したりして。そうなると、その中で障害者、弱者救済の関係で、いざ助けに行く場合、一人じゃ助け出せないわけですね。少なくとも２人なり、３人いないと、老人なり、目の不自由なり、足の不自由なり、そういう人たちを。

市長：そうですね。ちょっと富岡会長、一回よろしいですか。時間がどんどんなくなってきているので、１巡ずつだけでも時間がなくなっちゃって、次のところになかなか行きづらくなっちゃうので。
　松本さん、今、井田の話が出ましたので。

松本さん：井田第４町会の町会長の松本でございます。
　私の住んでおります町会は、皆様のこういう平らな平和なところと全然違いまして、山坂の多いところで、がけ崩れも心配なところでございます。私が町会長になりましたときに、「みんなで助かろう住んでいてよかった第４町会」にしたいということをキャッチフレーズにして、やっております。
　私たちの町会は、先ほどお話に出たんですけれども、民生委員の方からは、守秘義務がありますので、どんな人を助けて、どんな人をどうするかということはできませんので、ご自分たちで申請していただいているんですね。助けてほしい人と、ボランティアができる人ということで、毎年募集しておりまして、助けてほしい人はどういう障害を抱えているのかということも書いていただきまして、ボランティアは、例えば医者だったりとか看護師だったりとか、読み聞かせぐらいはできますとか、そういうことも記載していただいて。ですから、先ほどのベトナムの、何カ国語ができるというのも記載していただければ、そういうのを１年ごとに、施設に行かれる方、死亡される方もいますので、そういうものをつくって、私たちは町会の自主防災組織に加入されている方たちと共有しながらやっています。

やはり防災というのも、隣近所の顔が見えることと、近所の人たち、どんな人が住んでいるか、みんなで仲よくしていくことが命を守る一つだということを考えまして、昨年９月に井田山カフェというのを私がつくったんですけれども、そこでもひとり暮らしの方ですとか、そういう方が集まってきてくださって、すごく、あの人たちと知り合いになれてよかったというのと、何よりも、ボランティアを募集したんですけれども、今１８人で毎回動いているんですけど、その動き方が皆さん、すばらしくなってきたということがありまして、それが防災の何かがある、避難して、避難所でもこういう人たちが、こういうふうに活動してくれるんだなというのを、私は楽しみにといいますか、頼もしい気持ちで拝見しております。

それと、避難訓練をやったからどうこうということではなくて、例えば発電機は公園清掃のときに毎回、発電機を動かしてみようよとか、例えば医療品につきましては、毎年、町内会旅行がありますので、町内会旅行のときに医療品の確かめをしようよということで、そのついでにやってはいるんですね。だから、避難訓練のためにやるのではなくて、何かあったときに、すぐ役立つものをしておこうというふうな考え方でしておりまして。

どの町会もそうだと思うんですけれども、若い方の取り込みがやはり少ないということがありまして、私たちは、今年４月ぐらいをめどにしているんですけれども、町会のホームページをつくろうと思っているんですね。そこにいろんなことを書き加えたり、私たちは井田第４町会なんですけれども、こういう危険な場所なんだよ、みんなで助かろうねということも含めまして、全戸に、それこそひとり暮らしの老人にも、ひとり暮らしの若者にも、全戸にそういうことが行けるように、まずホームページを開設したお知らせを流してやろうと思っておりますが、何せ町会の役員というのは、ホームページとちょっとかけ離れた年齢ですので、そういう人たちを、今、取り組んで、勉強会を家でしております。

いろいろ、第４町会は本当に土砂崩れですとか、雨も大変な地域なんですけれども、助けてくださいというふうなことを申請してくださいということにしただけでも、すごく、私も見てもらえているんだねということで、うれしかったという報告と、大雨のときにはすぐ連絡が来て、私たちも車でつけて助けようよということになっておりますので、ひとり暮らしの老人の方もかなり、申請書を出すだけでも安心されているのかなというふうなことを思っております。

市長：ありがとうございます。

井田カフェはすばらしいですね。

松本さん：はい。すばらしいです。

市長：ボランティアの１６名の方たちというのは、どういう方ですか。町会の役員の方ですか。

松本さん：いえ、町会の役員ではないんです。

井田は山で孤立しておりますので、みんなで仲よくなりたいというのをずっと前から区役所のほうへ言っておりまして、たまたま提供してくださる場所ができたんですね。そこでボランティアを、チラシを出して募集しまして、今は１８名が動いているんですけれども、その人たちは認知症の講習と、車椅子の講習と、コーヒーの入れ方の講習を３日間やって、ボランティアの資格があるという。

市長：すばらしい。

松本さん：すばらしいと思います。

市長：すばらしいですね。ちょっとこの話はすごく答えというか、答えに近いものがあるのではないかという気がするので、後ほどまた。

中野さん、最後になって大変申しわけございません。日ごろから商店街活動を通じて、日常的に小・中学校を初め、かかわりを持っていただいているというふうに伺いましたけれども、ちょっとご紹介いただけますか。

中野さん：何せ地域密着型の商店街というのを一応目指していて、そのままなんですけれども。

小学校と高校のほうへは教育委員みたいな形で一応お伺いさせていただいております。名前はそれぞれ違うんですが、会議があるとそこに参加したりしておりますし、小学校のほうでは、特に小学４年生全員に、まちなか安全教室みたいなものを開きまして、外でもし災害にあったときはどうするかということを、これは慶応大学の学生たちに手伝ってもらってやっています。先ほどの３．１１が終わった次の年から始めていまして、このシナリオも学生が全部つくってくれたもので、いまだにしっかりしたものだと思いますし、これを、もし大学生でなくて、高校生と一緒にやれるようになったら、全国的に広げられるかなというふうな思いもあります。なかなか外で遭うというふうなことを子供たちも考えたことがないと思うので、そういうところを改めて親御さんにも考えてもらいたいなというふうな思いがあります。

それから、商店街の中では一店一安心運動みたいな形で、うちの店では災害があったとき、もし無事だったらというのは当然つくんですけど、そういうときにこういうことをしますとか、トイレをお貸ししますとか、いつもの閉店時間までは開けておりますとか。これに関しても実際、３．１１のときには何人かお客さんが相談に来たりとか、そういうのもありましたし。

あと一番困ったという点では、コンビニエンスストアというのは電気が切れちゃうとお店を開けてくれないというか、売ってくれないんですよね。ある店舗が１件、品物を売ったんですけど、それが非常に上に触れて怒られてしまったという話があるので、こういうところをもう少し改善できたらいいのかなという気がしますけどね。

なかなか商店街は通る人が多いので、駅前にある商店街なものですから、買い物に来るお客さんと一般の通行人、両方の安全安心を考えていろいろ行動していきたいと、これからも思って、続けていきたいと思っています。

市長：ありがとうございます。

何しろ中原区の商店街は、オズ通りもブレーメンもそうですけれども、ある意味、全国でも非常に珍しい先進的な取り組みだとか地域貢献なんかをやっていただいているところだと思いますので、ぜひ。

中野さん：言い忘れました。

うちの商店街はメールとラインで会員を募集していまして、メールのほうでは４，０００人、ライン＠なんですが、ライン＠では１，８００人ほどの会員を募っております。ですから、何か災害があったときには逆にこれで流せるというのがありますし、これを中継してくださるのが和歌山県の新聞社、夕刊専門の新聞社なんですが、そこから情報を送ってもらうようにしているんですね。そうすると、うちのほうと和歌山県と、両方で情報を送り合えることになりますので、非常に効率がいいのかなと思って、ずっと続けておりますし、ほかにいつもお買い得情報などを流していまして、一番最後に子供支援のことを流したりとか、そういうようなことをやっておりまして、非常に好評を得ております。

市長：ありがとうございます。

中野さんの話にしても松本さんの話にしても、共通しているのが日常的なことから始まっているというこ

とだと思うんですね。いざとなって、防災になって、災害時になってから始まるのではなくて、日常にそういう顔の見える関係というか、そういうものができているか、できていないかということがすごく大事なんだと思います。

亀井さんが一番最初に冒頭で触れられました、例えば防災訓練のところへ来て、例えば高齢者の方が相談をして、いろんな情報はあふれているんだけれども、もう一歩踏み込んだ、もう一層深いことに相談にのれるというのは一体何だろうかという問題提起がありましたけれども、例えば松本さんがおっしゃったように、いわゆる地域のカフェ、コミュニティーカフェっぽい場所、居場所づくりというところというのは、一つのソリューションになり得るでしょうか、亀井さん。

亀井さん：ありがとうございます。

結論から申し上げると、なり得ると思います。例えば今、私が活動している小杉駅周辺エリアマネジメントは防災防犯・安全安心とコミュニティーは二輪で動くものだと認識しているんですね。なので、別の動きとしては、コスギフェスタに代表されるようなお祭り、コミュニティーの活動、そこで会っている人たちの顔をつなげていくというようなことですね、それをやっていきながら、もう一つでは防災情報の啓発ですとか、問題提起、解決みたいなところをやっていくという、そういう動きなんです。

おっしゃるとおり、祭りですと、何というかな、一過性というと変ですけど、一回にガーッと集まって、またその次というふうになりますけど、継続してコミュニティーを形成する仕掛けというところも必要だなと。そこで一ついただいた井田カフェというところもそうですし、ライン@、メールなんかを使った情報共有というところもすごく大きな状況になるかなというふうに感じる次第です。

市長：ありがとうございます。

そうですね。ですから、ライン@というのも、日常的にそういうふうなのでつながっていると、災害時のときにも役に立つ。日常的に松本さんの井田カフェみたいなもの、どういう支援が必要なのかというのが、何々さんはこうだよねというふうなのがわかっている、それも同じ町会の中でわかっているということというのがすごく大切だということですよね。

もう一つ、中学生はマンパワーにとってすごく大事だということで、何人かからコメントがございました。松原さんの挨拶運動なんかという、何か仕掛けていくときには、子供を通じてというのは力が大きいよというふうなご発言もありましたけれども。

小野山さん、どうですか。

小野山さん：私どもの団体は、いろんなところでもお話が出ていると思うんですけど、地元に、高校生になっちゃうと、どうしても都内とかあちこちに出ていって、昼間はいらっしゃらないことが多い。でも、中学生、私が思うに小学校高学年から行けるんじゃないかと思うんですけれども、子供さんから知識や技術を吸収して、親に伝達していく経路を確保するということは、危機意識を端に追いやっている親御さんというところの状況が好転してくるのではないかと考えています。もちろん子供さんへの動機づけは大切で、行ったから何もないよという感じではなくて、自信を高めるようなもの、活動を取り入れていけばいいのではないか。例えば川崎市では市民救命士とか、あと川崎ならではの子供による地域アップ力の資格とか、あと、ちょっと区民会議さんでも出ていたんですけれども、ハグゲーム、避難所開設ゲーム、そういうものを活用して、自然に遊びの中で知識をつけていけるようなことでも回っていくのではないかなと思います。

あと、いろんなところで今、学校さんと地域の方が連携していきたいというふうなお話をたくさん聞いていますけれども、ここはすごくお互いに思い合っているのに何でかなというのがすごくあって。学校側の先生方にもいろんなお仕事があって、なかなか時間がないとか、そういうこともあると思うし、できればポイ

ントを突いた、そういう動きで連携し合えば。あとマッチング、コーディネーターとか、そういうところで結び合えるシステムがあればいいなというふうな。ちょっと、ごめんなさい、余計なことですが。

市長：いえいえ。ありがとうございます。
　学校も、この前、宮前区の車座をやったときに、おやじの会が非常にいい役割を果たしていて、おやじの会の活動をしていると、そのまま町会の役員になっていくとか、そういうパターンが結構あるという話もあって、そこは学校と地域と、うまいコーディネーターになっているという。団体もそうですし、そこにいらっしゃる個人個人のコーディネート能力というのは非常に高いものがあるので、そういう活動をされる方というのは。そういうのも大きなマンパワーの一つなんじゃないかなというふうに思いますね。
　先ほど渡邉さんとかターイさんとか、実は僕、今の発言を伺いながら、そうか、日常的な話、例えば同じ聴覚障害をお持ちの方々、日常的に例えばメールなりラインなりという形で、ネットワークで情報交換しているものというのは、何かございますか。

渡邉さん：日常的に交換しているものというのはないんですけれども、どちらかというと、当事者団体が決まった場所をつくる、例えば会報誌であるとか、そういったもので情報を共有する、そういうことは行われています。災害に関して、聴覚障害者の災害訓練というものを年に１回、それぞれの区で、いこいの家などで行っています。そこから災害が起きたときに拠点になる場所、聴覚障害者の情報提供施設ですので、情報文化センターに対してメールを送ってもらうというような訓練をしています。
　それで、民生委員さんにも参加をしていただいて、聴覚障害者の理解を広めるという活動をやっているんですけれども、顔ぶれが変わらないんですね。そういうところはある。
　また民生委員さんも、聴覚障害者のことを、きのうも民生委員さんの方がセンターに来られて、どういうふうにコミュニケーションをとればいいのかというお話をいただきました。皆さん、同じように思われていると思います。
　どういうふうにマッチングしていくのかというのが、個人的には課題だと思っています。

市長：課題ですね。
　ターイさん、例えば川崎で今、非常に増えている、国籍で言うとベトナム籍の方は非常に増えていて、特に若い方も非常に多いので、そういうコミュニティーのネットワークみたいなものはあるんですか。そうすると、すごく日常的な情報もお伝えしやすいし、それがひいては災害時にもとても役に立つのではないかと思うんですけど。

ターイさん：近くに、ベトナム人の会社の同僚は４人になって、みんな、ラインで情報を共有しています。問題は、ちょっと隣の日本人の知り合いがいないです。毎日、何があったら誰に聞けばいいか、ちょっとわからない。でも、ベトナム人同士は、そういうネットワーク、みんなのメールとか、フェイスブックとラインでよくつながっていますけど、でもちょっと日本人とのやりとりはない。隣の人、知らない顔、知らない。

市長：いろんなグルーピングがあると思うんですね。町会というグルーピング、あるいは今、妊婦さんというグルーピングもあれば、外国籍、ベトナムの方のグルーピングとか、あるいは聴覚障害を持っているグルーピングとか、多分そういうのと、それの上にさらに地域での、自分の住んでいるところでのというふうな、両方の縦軸と横軸がちゃんと交わっていないと、多分困るんだと。それも日常的にやっていることが大事なんじゃないかということを改めて、私も今、気づかされています。
　そのための、例えば地域ごとに、最近はコミュニティーカフェというのが井田カフェのような取り組みと

いうのが実は市内で、この２年ぐらいでものすごく増えてきています。これは地域包括ケアシステムというものの取り組みの、まさに地域防災というのは地域包括ケアシステムそのものですよね、松本さん。こういうので日常的に顔の見える関係をつくっておくと、災害時にも役に立つ。ですから、そういう意味では子供たちから、川崎市の地域包括ケアシステムというのは全ての市民が対象になっているので、子供たちとの接点というものをつくり出していくということも大事だし、独居の高齢者とも、どの方が見守りが必要なのかなということというのをつくり出していく。

ちょっと、さっき富岡会長の話のそばから、話が途切れてしまったのですが、地ケアのことで、相当いろいろご苦労をおかけしているので、防災、地ケアの話をどう捉えておられるかというのを、少し感覚的な話をしていただいてもよろしいでしょうか。コメントをいただければと思います。

富岡さん：まず基礎となるのは、私どもは町会の体制整備なんですね。さっきの災害時の安否確認の場合ですけれども、町会名簿が作成できなくなっちゃったんですね。ということは、先ほど来、言われている個人保護法で、関心がないのではなくて、私の情報を出したくないと。そうしますと、町会費をもらっている数はわかるので、世帯はわかるんですけれども、そこに何人いるのか、家族が。そうすると、災害時になったら安否確認をどうするか。近隣の昔からいる人は、隣近所で仲よくしているからいいんです。ところがアパートとかマンションとか、何年かに一回、変わっちゃいます。新しい住民の動向がわからない。先ほども言いましたけど、町会に入っていない人もいますし。そうしますと、いざ災害があったときに大変、役員の体制は、先ほど言いましたように決まった人間しかいませんけれども。

たまたま３．１１で電車の電気もとまりましたよね。帰宅難民でそのとき私の娘がたまたま自由が丘から歩いてきたんですね。やっぱり４時間ぐらいかかったと、４時間か５時間ぐらい。普通に歩けばそんなにかからないはずなんですけどね。そうしますと、たまたま道がわかっているから歩いてこられましたけれども、そうじゃない人は、どう帰ってくればいいか、わからない。いろんな問題が出てきますし。

市長：いわゆる、町会に入っておられる方の割合がどんどん減っているということ、これは全市的な課題で、すごく困っているんです。なるべく地域の活動に参加して、町会にも入っていただきたい。これは一生懸命これからも取り組まなくちゃいけないのですが、その話と分離不可分なんですけれども、しかし、町会に入っていなければ救えないということであっては困るので、そういった意味で、あらゆるネットワークというふうなものを、穴がないように、どうやって結果的にするかなということを、防災も考えなくちゃいけないですね。

富岡さん：そうですね。ですから情報を、今言いましたように、あらゆる手段で伝えていくかというのが課題だったと思うんですね。いわゆる広報になろうかと思いますけれども、日常の災害に対する、じゃあ、旧住民から言えば、避難所はあそこだとわかる、新しい人は避難所がどこか、わからない。たまたま、選挙でも投票所を間違えてくるとき、いるわけです、近所に住んでいても。ちゃんと場所を書いていても。だから、災害になれば、もっと混乱しちゃう。

市長：もう一つ、後でもう一回やりますといった話に、ちょっと行けずになりそうなんですけれども、実はどうやって、僕たち、ここに集まっている全員の共通認識というのは、今、富岡さんが言われたように、関心がある人たちは毎回出てきて、情報も取りにいってということなんですけれども、関心があるけど参加しない、そもそも関心はそれほどない、地域に余りいないというふうな方たちも、いざ発災したときには共通の被災者になるわけで、そういう人たちをどうやって日常的に巻き込むかという知恵を、もう少し深く議論したいのですが、時間も相当なくなってきたので、少しコメントを物すごく短く、端的にコメントをそれぞ

れにいただけたらありがたいのですが。このテーマで少しコメントのある方、手を挙げていただけないでしょうか。
　本木さん、お願いします。

本木さん：避難所運営会議とはまた別に、私どもの町会として、両方に私もかかわっている部分がありまして、年に２回、避難所開設訓練と防災訓練というのをやっている傍ら、自主防災の部分では安否確認も実施している状況です。そういう意味で、先ほど気づきの黄色いシールがあったんですけど、私どもとしては無事ですというタオル、黄色のタオルを掲げて、掲げた家庭に関しては、もう。地域の部分でも地区理事という分担制をとっていますので、例えば８世帯、１０世帯、多いところで２０世帯ぐらいある地域もあるんですが、そういう地区理事は毎年変わるんですけれども、そういった方々が地区の安否確認をした情報を自主防の集約しているところに届けるという部分、それを今度は伝達の部分で、避難所運営会議のほうに持っていく。そういう情報伝達をさせている状況です。
　そこの部分で、毎年、地区理事さんが変わっていく。そのときに、こんな安否確認を毎年実施していますと。そこの部分は、地区理事さん、申しわけないですけれども、お願いしたい、年２回ぐらいやるんですけれどもお願いしたいと。あわせて、地区理事さんというのは毎年の町会費を集金しなければいけない。そのときに、地区理事ですから、情報として、お金を集金するときに、こういう災害があったときに安否確認に役立てたいので家族構成、今住まれている人数というのを、情報を教えていただける方は教えていただけませんかと。そういう形で我々としても、それを発せられない家族もいらっしゃいます、ですけれども、そういう情報を得られた方に関しては、安否確認のときに、この世帯としてはオーケーですよということを情報として伝達する。やはり、何でそんなことまで言わなきゃいけないのかと聞かれる方もいます。大事なのは、やはり避難所だけでなく、地区でもって、先ほど市長もおっしゃったように、安全な家屋に、地震があったときも住めるところは住んでいただくという部分で、自主防の中に残られる方というのもたくさんおられる。そういったところで、災害が長期化したときに、いろいろな物資の補給もしなければいけない、そういったところは、自主防から直接、災対本部のほうには行けないですよね。ルールがある中で避難所運営会議の部分に一回申し立てて、自主防に必要なものはこんなものがあってという伝達をした後に、避難所運営会議から災対本部のほうに要求していく。そういうことが必要なので、町会としてもそういう情報が必要なのでよろしくお願いしたいというような形でやっています。

市長：各区の町会も、市の町会の役員会なんかにも行くんですけれども、こういうノウハウはぜひ。やっているところは当然あると思うんですけれども……。
　内藤さん、どうぞ。

内藤さん：うちの町会では毎年、町会費納入時に、庶務班というのがあるんですよ。それが１０名ぐらいいるんですけれども、その方に、集める人の範囲で、全部の名前、家族構成も全部、出してあります。そのかわり、個人情報なので、大人が何名、子供が何名、ここの家にいますよというのは、必ず、その班の人は全員、知っているような形で配ります。それはやっております。
　それとあと、要援護者がありますよね、その方たちも、その班の中にいれば、一応必ずそこへ行って、民生委員と私たち役員が行って、その班の人にお伝えしますよというような形で承認をとります。それじゃないと助けられないので。

市長：なるほど。ありがとうございました。
　町会費をもらいに行くというのは非常にハードルが高くて、なかなか行きづらいよねと、ピンポンして、

町会費払ってくださいというのは言いづらいけれども、しかし、何というか、防災の、いざというときのためには、こういうふうな形で確認させてもらっていますというふうなことというのは、非常に入りやすいというか、それでも大変でしょうけれども、しかし、それは町会費を払うほうとしても非常に納得感があるやり方ですよね。ですから、そういうノウハウというのは、やっているところはやっている、やっていないところは、ただ知らないからやっていないというところもあるかもしれませんね。そういうのは少し情報として横展開で、区内でも、あるいは市内全域に、そういうプランがあるんだと、そういうやり方をぜひというふうな、一つの方法として、ぜひご紹介を今後していきたいと思います。ありがとうございます。
　先ほど松本さん、手が挙がりましたけれども。

松本さん：そうですね。要援護者については先ほどの方のところと同じで、私たちも申し出ていただいて、そちらを訪問するという形をとっているんですけれども、若い人たちをどんなふうに取り込むかということで、やはりホームページに、何で避難訓練をやるかということは、生きてほしいからだというようなことをすごく具体的に書いたりして、今、テストでやっているんですけれども、そういう訴え方を若い人たちにもしていこうというふうに思っています。やはり口で言ったり、回って行ったりするには限りがありますので、単身世帯の方たちもみんな、町会の人なんだよということを、来たから、みんなで避難訓練とか、ほかにも行事があるんですけれども、そういう理解を深めていただこうかなという意図もあります。

市長：ありがとうございます。
　若手が何人かいらっしゃいますが。どうぞ、押田さん。

押田さん：若い人の意識を高めていくということで、防災意識の向上につなげるということから考えると、やはり、そこの力を発揮できるのは学校かなというふうに、今、お話を伺っていて思いました。今、学校の中では、子供たちが自分の命を守るということでの訓練に主体を置いているんですけれども、そうではなくて、これからは、万が一のときに自分が助けられるだけではなくて、自分にできることをどういうふうに地域の中で行っていったらいいのかなという視点も含めて、学校教育を語っていかなければいけないのかなというふうに感じました。

市長：ありがとうございます。
　亀井さん、どうぞ。

亀井さん：端的に申し上げると、一つ、できること、できないことというのを、それぞれの立場の人がはっきりと出すことかなというふうに思っています。町会もそうですし、避難所もそうです、学校もそうだと思います、行政もそうだと思うんですね。できることと、できないというか、できるかどうかわからないところ。そのあたりを出していくことによって、ここは頼ってもいいんだ、ここは頼っちゃだめなんだ、自分次第なんだというところ、このあたりの空気といいますか、ここは頼れる、頼れないというところの空気をつくっていく。そうすると、ふだんは防災に対して関係ない、興味がないと思っていても、空気というのはやっぱり確実にあります、自分にふりかかってくることですので、そういうところをつくっていって、じゃあどこに聞けばいいのかなというところにアクションを促す、そのために現実的な情報というのをいかに出すかというのは、一つ、有効になるのかなというのは、日々僕が感じるところです。

市長：ありがとうございます。
　いや、これは本当にとても大事で、私も心がけているつもりなんですが、行政はここまでしかできないと

言うことは、実はすごく勇気の要ることなんですけれども、しかし現実問題としてはそうなんですということを言わないと、その先の現実的な連携ができづらいんですよね。町会さんと話していてもそう思うんですけれども、ここまでしか、うちは現実問題のマンパワーとして無理ですよというふうなことをはっきり言うところから、じゃあ、しようがない、その中でもやるしかないよなというリアルな話になっていくので、それは本当に大事だと思いますね。私もそうですし、区長以下、私たちもしっかりとそこは、信頼関係がある中で、そういうふうな言い方をさせていただきたいなというふうに思いますし、一般市民の皆さんに対しても、先ほど、備蓄がこれだけしかないんですよというふうなものを、それは誰の食べ物なのかということをちゃんと言わない限り、何となく、あるんでしょうというような形になってしまうというふうなことを、はっきりさせていきたいと思います。ありがとうございます。

もう、あと本当にお一人ぐらいの時間帯になってしまった。どうぞ。

ターイさん：きょうの皆さんの話を聞いて、次の町内会に行きたいと思います。今まで町内会に行ったことがないです。

市長：ありがとうございます。

いいお話ですね。若手から、町会に行ってみたいというふうな話がありました。やっぱり町会は大切な地域の組織で、そこに、ある意味、行政も非常に頼っている部分があるし、そこのパートナーというふうなものがないと、なかなかできないというふうなのがあります。町会だけで全てが完結するかというと、そうでもないので、そこは、だから自分たちの強みというふうなものをどう生かしていくかなんだと思います。

松本さんが先ほど言われたように、地区役員も少し高齢化してきているので、そういうふうな若い人たちの、例えばＩＴの技術だとかを少し入れていきたいという。

実は、前に地域の寺子屋のフォーラムをやったときに、学生さんを呼んだんです。そうしたら、学生さんは、こういうふうなのを知らしめていく、学生さんたちに地域の寺子屋の先生をやってもらうにはどうしたらいいかなとシニア世代の方が言ったら、私たちはできますよというふうな学生さんたちが何人かあらわれたんですね。このことの情報発信をＳＮＳ、インターネットを通じてやっていくと可能性は広がっていきますという話だったので、いかに、やっぱりいろんなチャンネル、多世代をまぜていくかということに注力していかなきゃいけないなと思わせていただきました。

本当に時間はもう既に１５分ぐらい超過しておりまして、尽きない話ではありますけれども、今日も私は大変いいご意見をいただいて、学ばせていただくことがたくさんございました。

本木さん、最後にどうしても言いたいと。簡潔にお願いします。

本木さん：すみません。我々もやれることはやる、行政もやれることはやっていただきたい。そこの部分の一つで、やはり公助という部分をどうしても市民は期待してしまうところがあります。そこの部分で、避難所運営会議のところにも地域要員として何名か配属されるというのがあるんです。そこがなかなか来ていただけない、見える化されないという実態が、非常に取り組んでいる姿勢を市長はお話しされるんですが、実態としてそれが伝わらない部分だと、どの人が、避難所運営するときに行政の地域要員の人が来るんだ、そういった方々にじかに、やはり触れていただけるという場を、やはりできるだけ構築していただけると、これだけ行政も一生懸命に我々市民のために力を貸していただけるんだなという、非常に見える化ができるんではないかなという部分があるので、ぜひ、そこをお願いしたいなと思っております。

市長：そうですね。ありがとうございます。

まず、現在進行形でそれが動いていまして、全職員に、職員番号みたいなものが割り振られて、この人は

ここの避難所というふうなことを指定されるというふうなことで、現在進行形で今、動いているので、そういう形で顔の見えるというか、うちはこの人なんだということが見える体制というようなことを今やっている最中です。もう少々お待ちいただければと思います。今まで、ややそのあたりというのは曖昧であったものを、しっかりと張りつけていくというふうな形になっております。お願いします。

本当に長時間にわたってご議論いただきまして、本当にありがとうございました。

一つ、まとめ的に申し上げると、防災の話というのは、先ほどの話じゃないんですけど、地域包括ケアシステムの地域づくりそのものでして、日常的なことができないところに防災、いざといったときには、いきなりできることはないということだと改めて認識させていただいて、本木さんのような、１３の自主防災組織をまとめていらっしゃって、もう２回、次もやってという形で強固にされているところもあれば、あるいは松本さんのところのように、一つの町会でカフェをつくって、一人一人を見ていこうというふうなことをやっているところもあればというふうに、いろんなやり方があると思うんですけれども、それぞれに大きなヒントがあったと思います。そこには日常ということがキーワードだというふうに思います。

それともう一つは、いかに既存の人たち、関心のある人たちだけじゃなくて、地域にかかわっている人たちという非常に限られている人たちではなくて、いかに外側の人たちを巻き込んでいく必要があるか。そのために、これまた同じキーワードでありますが、日常的につながる仕組みをつくっていく。それはイベントであったりするかもしれないし。一つは、日常的なライン＠の話がありましたけれども、ああいうネットワークであったりするかもしれないし。そういうふうな形で補っていくという仕組みが必要だということを、わからせていただきました。

今度、来年度になりますけど、３０年、来月４月から迎える新年度、また新たな地区で、中原区で防災訓練をやらせていただく。そのときには、もう少し新しい人たちが来れる、そういう仕掛けというふうなものを、今日松原さんからもお話がありましたし、いろんな、小野山さんからも子供たちを、どういうふうに学校を巻き込んでいくかというヒントもあったと思います。こういうヒントが幾つも今日は出てきましたので、次の訓練のときにそれが少しでも生かされるというふうな形にして、いい形にスパイラルアップさせていきたいなというふうに思いました。

きょうは本当に、長時間にわたりましてご議論いただきましてありがとうございました。

司会：以上をもちまして、第３５回区民車座会議は終了させていただきます。

本日はご来場いただきまして、まことにありがとうございました。

市長：ありがとうございました。